

ヘブル4章14節～5章10節「私たちの大祭司」

私たちがみことばを聞き、神に向かうなら、自分の罪を明らかに示され、悔い改めに導かれます。直前の4章12～13節で言わわれているように、神のことばは鋭い力を持っていて、人の心の思いのすべてを判別します。私たちはみことばによって自分の罪を示されます。また、すべてをご存知の神は、私たちの心の奥にある隠し事の一切を見通しています。やがて私たちは神の御前に立ち、すべてがさらけ出され、申し開きをしなければなりません。この深刻な問題に対する解決の道を与えるのが今日の聖書箇所です。著者はここで主イエス・キリストの大祭司としての職務、とりわけキリストのとりなしに注目するように勧めています。

1. 偉大な大祭司（4：14）

4章14節。ユダヤ人たちは、民の罪のとりなしを行う大祭司の働きを知っていました。その読者たちに著者は、主イエスこそが天の聖所に入られて、天において大祭司の職務を果たしておられると語ります。読者たちが知っている地上の大祭司と比べることのできないほどに偉大な大祭司であるというのです。

主イエスが偉大な大祭司であることを示すもう一つの面は、イエスが「神の子」であることです。主イエスは御子である神ですから、その大祭司の職務を完全に果たすことができます。

聖書の中で「イエス」と言うとき、多くの場合は人としてのイエスのことです。そのイエスが「神の子」であると言っています。「神の子イエス」という表現は信仰を告白しているのです。キリスト者たちは、人として、ユダヤ人として歩まれたイエスが「神の子」であると信じ、宣べ伝えました。

このような偉大な大祭司が、私たちのことを引き受けてくださっているのですから、「信仰の告白を堅く保とうではありませんか」と著者は勧めます。私たちもまた、信仰の告白を堅く保ち、伝えていかなければなりません。

2. 同情する大祭司（4：15～5：3）

偉大な大祭司である主イエスは、同時に「私たちの弱さに同情」してくださる大祭司として紹介されます。

4章15節前半。「弱さ」（複数形）には私たちのあらゆる弱さが含まれています。病気や老いによる体の弱さもあります。妬んだり、高慢になったり、誘惑に負けたりする弱さもあります。パウロが告白しているように、したいと思う良いことができず、したくないと思う悪を行ってしまう弱さもあります。

そのような私たちのそれぞれが持っている弱さに主イエスは同情してくださいます。「同情できない方ではありません」と二重否定によって、必ず同情してくださることが強調されています。

ここでの「同情」とは、人の苦しみを外から眺めて大変だと思いを寄せるということではありません。元のことばは直訳すると「共に経験する」です。苦しんでいる人のところに飛び込んで行き、一緒に苦しむこと、相手の苦しみをそのまま自分の苦しみとして担うことです。

まさに神の子イエスはそのようになさいました。人として生まれ、生活し、人の苦しみを体験されました。そして、神の子イエスは神ですから、人と違って途中で投げ出すことはなく、どこまでも寄り添うことができます。大祭司である神の子イエスは必ず共にいてくださり、私たちの弱さをどこまでも担ってくださるのです。ですからパウロは、「弱さのうちに主の力が完全に現れるとの主のことばをいただいて、「私が弱いときにこそ、私は強い」（Ⅱコリ12：10）と語ることができました。

4章15節後半。「試みにあう」ということばは、罪を犯させようと誘惑することにも、成長させようと試練を与えることにも使われます。ここではその両方の意味合いが当てはまるでしょう。

福音書には主イエスが試みにあわれたことが記されています。サタンの誘惑、家族との関わりにおける葛藤、パリサイ人から挑まれた論争、ゲツセマネの苦悩の祈り、弟子たちの裏切り、人々に嘲られて神に見捨てられる十字架はまさに試みでした。主イエスは私たちが受けるあらゆる試みを経験されました。ですから、試みにあっている人をしっかりと受け止めてくださいます。

そして、主イエスは、私たちと違い、あらゆる試みにあっても「罪は犯しませんでした」。父なる神のみこころに従い、神に喜ばれる歩みを貫かれました。誘惑を受けて罪を犯してしまう私たちには経験できないほどの激しい試みにあわれた主イエスは、それゆえに私たちのことを理解し、同情し、助けてくださるのです。

4章16節。人が神に近づくことができるるのは、大祭司による犠牲ととりなしの務めがあつて、罪を赦され、きよめられるからです。イエス・キリストはご自身を贖いの犠牲として献げ、そして天でとりなしてくださっています。その大祭司イエスによって私たちは神に近づくことができます。

私たちが近づいていくのは「恵みの御座」です。さばかれて滅ぼされることはありません。イエス・キリストのゆえに、恵みが確かに約束されています。この特権を与えられているので私たちは近づくことができます。

そして、神に近づいていくときに与えられるものは、「あわれみ」であり「恵み」です。神があわれみ深く、恵み豊かであるから、私たちの罪を赦してくださり、私たちは契約にとどまることができます。

また、私たち与えられるものは「折にかなった助け」です。日々その都度、必要な助けを神は与えてくださいます。私たちが生きるために必要なすべてのものを神は与えてくださいます。また、私たちが必要とするみことば、導き、御使いの奉仕による助けも与えてくださいます。

ですから、私たちも「大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか」。

3. 従順な大祭司（5：1～8）

5章でも続けて、イエス・キリストがどのような大祭司であるかが語られています。大祭司である神の子イエスの従順が四つの面から教えられています。

一つは、神の任命に対する従順です。5章4～6節。アロンとその子孫が大祭司として神に召されたのと同じように、キリストも父なる神の召しに従わされたのです。

二つ目に、父なる神への信頼です。5章7節。十字架に向かう前夜、ゲツセマネの園で、イエスは底知れぬ苦しみの中から、「自分を死から救うことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ」されました。イエスは苦悩の絶頂において、父なる神の臨在の中に自分を置き、すべてを神にゆだね、神だけに頼りました。そして、みこころに従わされたのです。

三つ目は、神への恐れです。「その敬虔のゆえに聞き入れられました」。神への恐れとは、恐怖によって神から離れるのではなく、神に近づく「敬虔」です。神の召しに従い、神に信頼していたイエスであっても、十字架の苦難に従うこととは簡単なことではありませんでしたが、御父に近づいていきました。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください」（マタイ26：39）と祈りました。どのようなときにも、神に近づく敬虔、神への恐れをイエスはもっておられたのです。

四つ目に、神のみわざに対する従順です。5章8節。主イエスは受肉から十字架に至るまで一貫して従順の道を歩み通されました。「様々な苦しみ」の中でも、常に罪を犯さず、みこころに従われました。そして、人として「従順を学び」ました。神のみわざに対する人としての従順だったのです。

このようなイエス・キリストの従順は私たちの模範です。キリストは人として従順に生きるために、様々な苦しみによって従順を学ぶことを受け入れられたのです。私たちもイエス・キリストに倣い、神の召しに従い、神を信頼し、神を恐れ、神のみわざに従順であることを教えられます。

4. 信頼できる大祭司（5：9～10）

最後に、イエス・キリストは信頼できる大祭司であると言われます。5章9～10節。イエス・キリストはきよい生涯、十字架の死、復活、昇天を通して、特に「様々な苦しみによって従順を学び」、「完全な者」とされました。これはイエスが救い主として十分な方であることが実証されたということです。それゆえ、「ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり」ました。イエス・キリストは信頼できる大祭司なのです。

私たちはしばしば試みにあいます。誘惑があり、試練を経験します。その中で自分の弱さを悲しく思い、信仰を揺るがされることがあります。自分で解決できるわけではありません。信仰者として歩み続けるために、私たちには天からの助けが必要です。大祭司である神の子イエスに拠り頼み、とりなしてくださることを確信して、「大胆に恵みの御座に」近づきましょう。

キリストが学ばれた従順を私たちも学びましょう。苦しみの中でみことばを聞き、苦しみによって学ばれた主イエスを思い起こし、主に従いましょう。苦しみの中でご自身に従う者を、主は必ず支えてくださいます。